

『ハックルベリー・フィンの冒険』

— ハックへの執着と3度の中断がもたらしたもの —

浅 井 みどり

序

マーク・トウェイン (Mark Twain) の『ハックルベリー・フィンの冒険』(Adventures of Huckleberry Finn) は表面的には『トム・ソーヤの冒険』(The Adventures of Tom Sawyer) の続編として少年少女向けの冒険小説という形式を取ってはいるが、実はアメリカ社会が持つ様々な問題を中核に据えた、むしろ大人向けの小説といえるのである。この『ハック・フィン』はトウェインの中期の作品にあたり、まさに optimist から pessimist への過渡期に書かれたものであり、完成までに8年の歳月を要している。8年と言えど途中、何度も中断を繰り返している。故にその中断をめどにトウェイン自身における変化と、それが作品にどのような影響を与えているかを考察することが、この論文の目的である。

1. トムからハックへ

『トム・ソーヤの冒険』の構想は、大体 1872 年頃⁽¹⁾ に得られ、執筆を始めたのは 1874 年⁽²⁾ からである。その後1年間で書き上げ、訂正を加えて 1876 年の出版に至るわけである。そして『ハックルベリー・フィンの冒険』の構想は『トム・ソーヤの冒険』を脱稿した 1875 年に既にトウェインの中に芽生えていたのである。

I have finished the story and didn't take the chap beyond boyhood. I believe it would be fatal to do it in any shape but autobiographically—like Gil Blas. I perhaps made a mistake in not writing it in the first person. If I went on, now, and took him into manhood, he would just like all the one-horse men in literature and the reader would conceive a hearty contempt for him. It is not boy's book, at all. It will only be read by adults. It is only written for adults.

.....
By and by I shall take a boy of twelve and run him on through life (in the first person) but not Tom Sawyer—he would not be a good character for it.⁽³⁾

これはトウェインが 1875 年 7 月 5 日にハウエルズ(William Dean Howells)⁽⁴⁾ に宛てた手紙である。この時トウェインはトムという少年に対して彼を主人公にした作品を書くことにある種の限界を感じていたのである。そして、ここではトムではなくハックを主人公にして、また彼をナレーターに first person で書く作品を予定している。このようなトウェインの気持の変化は、既に『トム・ソーヤ』の中に読み取ることができる。というのは、物語の前半部ではあまり目立たなくあくまでも脇役的存在であったハックが第24、25章あたりから舞台の前面に登場し、その台詞の数も増えてきているのである。そして、第29章ではダグラス未亡人(Widow Douglas)を救うというトムにも優る英雄的行為をさせているのである。途中、トムとベッキー(Becky Thatcher)の洞窟のシーンがあるにせよ、物語が約3分の2を過ぎたところからハックの存在が浮き彫りにされ、また逆に言えばトムの存在がやや薄らいできており明らかにトウェインの視点がトムからハックへと移ってきていることが分かる。トウェインの筆がハックを描くことに執着してきているのである。

次の手紙は 1875 年11月23日に、同じくハウエルズに宛てて書かれた手紙である。

As to that last chapter, I think of just leaving it off and adding nothing in its place. Something told me that the book was done when I got to that point—and so the strong temptation to put Huck's life at the Widow's into detail, instead of generalizing it in a paragraph was resisted.⁽⁵⁾

この手紙が書かれた時期といえは『トム・ソーヤ』を一応脱稿したものの、まだ原稿に訂正を加えていた頃である。しかしながら、未亡人のもとで生活するハックの姿を描きたいという姿が伺え、ここからもトウェインがいかにハックに執着しつつあったかが理解できる。また、未亡人のもとで生活するハックの姿というのは『ハック・フィン』の冒頭の数章にあたり、この時点で、既にトウェインの頭の中にハックを主人公にした新たな物語の冒頭のシーンが浮かんでいたのである。

何故、トウェインはトムを主人公にした物語からハックを主人公にした物語を書くことに執着し始めたのであろうか。その理由の一つとしては両者の生活態度や生活信条の違いにあるといえる。

トムはいわゆる悪童ではあるが、住む家があり、共に生活をする人もいる。また、本人にすればいやいやながらも学校へ通いそれなりの教育も受けている。彼は一応、社会の一員としてセント・ピーターズバーグ(St. Petersburg)という社会の中で生きている。そ

して、何をするにしても常に周りの人の目、自分に対する評価と言ったような体裁を気にし、形式的な掟に従って行動するのである。まさに civilized された少年である。トムも確かに何かにつけて英雄的存在になりたいという夢を持ち、自由に憧れ、自由を求め、社会に反抗することもある。しかし、彼が求めている自由をいうのは、あくまでも文明と社会のなかで成り立つものであり、結局は空想と遊びの世界のものに過ぎないのである。故に、彼の反抗というものは、現代の中高生が見せる反抗とはその表れ方が多少違うにせよ一般的に大人への過渡期にある多感な少年が、やがて健全な市民へと成長していくためのほんの一時的な極めて冒険的なものでしかなかったのである。従って彼の社会批判は、社会という体制内からのものに過ぎないのである。このようなトムの反抗は当時のトウエインの複雑な感情——上品で、社会的体面を重んじ、個人に対して抑圧的な東部の社会に対する違和感——を反映するものではあったが、彼の内面に次第に積もりつつあったアメリカ社会の腐敗、墮落に対する不満と幻滅感を完全に解消するものではなかった。故に、トウエインはトムに限界を感じたのである。

また、もう一つの理由としては『トム・ソーヤ』の中でトムと言う人間が完成されてしまったということが挙げられる。第23章でトウエインはトムを法廷に立たせ、墓場で起きた殺人事件について証言させるのであるのであるが、このトムの証言によりマフ・ポッター (Muff Potter) の無実が証明され同時に新犯人が判明するのである。そして第24章は次のような冒頭で始まる。

Tom was a glittering hero once more—the pet of the old, the envy of the young. His name even went into immortal print, for the village paper magnified him. There were some that believed he would be President yet, if he escaped hanging. (6)

トムはこの時点で、もはや悪童ではなく町の英雄となり、誰もが将来有望と認める少年となったのである。つまり、civilized された少年が望むように最も理想的に完成されたと言えるのではないだろうか。そう考えると、ここで大好きな名声を欲しいままにしたトムがその後、何かまた自由を求めて冒険しようとしても先は見えてくる。故に、トウエインが "... he [Tom] would not be a good character for it." と述べているのは『トム・ソーヤ』を書き終えて得た彼の必然的認識であったのである。そこでトウエインはハックに目を向けたのである。ハックは社会の底辺に生きる無教養な浮浪少年である。そして文明や社会に背中を向け、それらに汚染されていない、いわば自然児である。自分の気の向

くまに本能のままに生きている primitive な少年である。トウェインは、このようなハックを主人公にしてならば、社会の枠にとらわれずに物語が書けると感じたのである。ハックの曇りのない目を通してアメリカ社会の現実を暴露し、批判しようとし、同時に、ハックを通して自分自身の帰属の場を求めようをしたのである。また、これらを直接作者の言葉としてではなく、ハックをナレーターにし first person で書くことによって、あくまでも育ちの悪い、無教養で卑劣な浮浪少年の眩きに過ぎないと言う逃げ道を作っているところからもこの作品に対するトウェインの思い入れが感じられるのである。

2. 余儀なくされた最初の中断——1876年——

1876年 8月 9日のハウエルズに宛てた手紙の中でトウェインは次のように述べている。

I . . . and began another boy's book—more to be at work than anything else. I have written 400 pages on it—therefore it is very nearly half done. It is Huck Finn's Autobiography. I like it only tolerably well, as far as I have got, and may possibly pigeonhole or burn the MS MS when it is done. (7)

この時、トウェインは『ハック・フィン』を原稿にして 400枚、当時の構想からすれば、全体の約半分⁽⁸⁾をいっき書き上げていた。しかし、書くには書いたものの、このまましまいで済むかもしれないと言っている。実際トウェインはこの後『ハック・フィン』の原稿を机の中に3年間、放置することになるのである。あれほど書くことを望んでいたハックの物語であるのに一体、何が起こったのであろうか。

『ハック・フィン』の第1章から第3章までは、作品の舞台もセント・ピーターズバーグであり、また『トム・ソーヤ』の第35章で約束していた盗賊団の結成のことが書かれており『トム・ソーヤ』の統編的要素が極めて強い。しかし、この『トム・ソーヤ』的世界は第3章の終わりのハックの言葉で断ち切られる。

So then I judged that all the stuff was only just one of Tom Sawyer's lies. I reckoned he believe in the A-rabs and the elephants, but as for me I think different. It had all the marks of a Sunday school. (9)

ハックはトムの空想は全て嘘であり、日曜学校臭いものであると決めつけている。これは少年の日の夢とロマンスの世界へのハックの訣別を表しているところであり、トウェインがこの物語は『トム・ソーヤ』とは違うのだと言うことを表明している箇所である。実際この後『ハック・フィン』は『トム・ソーヤ』とは随分違う展開を見せていくことになるのである。というのは、ハックが自由を求めて文明社会から脱出することにより舞台はセント・ピーターズバーグから離れることになり、また、この旅がハックとトムといったコンビではなく、ジム(Jim) という逃亡奴隷とコンビを組むことによってなされるからである。そして、ジムの登場によって奴隷制という問題が浮かび上がり、物語の展開に複雑に絡んでいき、ハックに苦悩をもたらすことになっていくのである。そして、ハックの苦悩はやがてトウェイン自身の苦悩になっていくのである。

問題は第8章においてハックがワトソン嬢(Miss Watson) の黒ん坊ジムに出会うことによって始まる。ハックはジムから逃亡の事実を打ち明けられ密告しないように頼まれるのだが、この問題についてそう深くは考えずにただ漠然と密告しないと約束するのである。こうしてハックは社会的立場の危機に陥るが、この危機は空間的にセント・ピーターズバーグから離れることによって簡単に回避されるものであった。

トウェインがこの作品を執筆していた頃、奴隷制の問題、つまりは人種問題は、まだ扱うには難しい問題であった。当時、奴隷制から解放された黒人は一応市民権を保証され、選挙権も行使するようになってはいたが、彼らを取り巻く南部白人社会はもとより、北部社会でさえ、白人は黒人より本質的には優秀であるという白人優越主義が消滅したわけではなかったのである。よって、ましてや白人の少年が奴隷の逃亡に手を貸すとなると、たとえ解放宣言が出された後といえど当時の国民感情からいって取り扱いに慎重さを要する微妙な問題であった。しかしながら、第8章を見る限りではトウェイン自身は、まだこの二人の関係がはらんでいるきわめて深刻な問題に気付いていなかったとみえ、十分に注意を払っていないのである。もしそうでなければ、このようにあっさりとはハックに逃亡奴隷幫助の約束をさせなかったであろう。

第15章になると物語の展開はさらに面倒なことになってくるのである。霧の中で起こったことについてハックがジムを騙し、結果的にハックがジムに謝するという展開になったからである。

Dat truck dah is trash; en trash is what people is dat puts dirt on de head er dey fren's en makes 'em ashamed. (p.72)

ジムが激怒してハックに言った台詞である。'trash' ——人間のくず——これはトウェインが人間を人間とも思わぬ奴隷制を平気で行使する白人に対して言ったのではないだろうか。ハックはこの言葉に大きな打撃を受け心から反省しジムに謝るのである。

It made me feel so mean I could almost kissed his[Jim's] foot to get him to take it back.

It was fifteen minutes before I could work myself up to go and humble myself to a nigger—but I done it, and warn't ever sorry for it afterwards, neither. I didn't do him no more mean tricks and I wouldn't done that one if I'd a knowed it would make him feel that way. (p.72)

白人の少年ハックが黒人奴隷の前に身を屈するこの行為は、まさに今まで家畜同然、人間扱ひされていなかった黒人に対して、一人の人間としての価値を認めたことになるのである。そしてまた、今後のハックの前途を決定するようなものであり重要な意味を持つ箇所である。ハックは悩みに悩んだ末、ジムに謝ることにしたのである。自分自身で納得した上での行為である。この結果、二人の信頼関係はより強まり、この先どう考えてもハックが密告するとは考えられない。つまりハックがこの先歩む道は、逃亡奴隷幫助の道しかないのである。

ここまで書き上げて、トウェインはようやく問題の重大さに気付いたのか第16章では今まで見られなかったハックの社会に対する良心と人間に対する良心の葛藤が浮き彫りにされてくる。

ハックは逃亡奴隷に手を貸してしまった自分の行為に次第に懐疑的になってくるのである。ハックは、社会的良心に目覚め、文明社会を基準にして考えた時の自分の罪の深さに苦しみ始めるのである。またその上、ジムが自由の身になったら妻や子を盗み出したいというのを聞いて、法律的な次元で逃亡奴隷幫助の罪を意識し、密告という形でこの罪から逃れようと試みるが結局は、社会に対する良心と人間に対する良心との板挟みになって、結果的には逃亡奴隷幫助の道へと進んでしまうのである。

この時、ハック同様トウェイン自身も葛藤を繰り返していた。先に引用したトウェインの手紙はこの時期に書かれたものである。このような物語の展開はもはや無教養な浮浪児がやったことという理由だけで簡単に済まされるものではなくなってしまったのである。トウェインが意気込んで書き始めたハックの物語は思わぬ方向へと展開してしまったのである。そしてトウェインはもはやこの旅を続けることができなくなり、ここで筆を置き、

『ハック・フィン』の原稿はこの後3年間机の引き出しの中に眠ることになるのである。

3. 二度目と三度目の中断まで——1880年——

第16章で中断してから3年後の1880年にトウェインは再び『ハック・フィン』の執筆に入った。1880年の冬に第17, 18章を書き、その後また中断して、同年夏に第19章から第21章を書き上げたのである。この第17章から第21章というのは、ジムと行動を共にするハックを描ききれなくなったトウェインが、二人の関係がはらんでいる深刻な問題に触れることなく物語を続行させる為に書かれた中継的エピソードである。しかし、物語の様相が大きく変化している箇所でもあり、その意味では中継的エピソードといえど見逃せない、大変重要な意味を持つところである。

第17章からハックはジムと離れ離れになり、また、ミシシッピー河(the Mississippi)を離れ陸の上の人となり、グレンジャーフォード家(Grangerford)という南部貴族の象徴とも言うべき家に落ち着くことになる。ここでの生活は封建的スタイルによって様式化された生活であり、ハックに、未亡人のところでの生活を思い出させるようなところであった。ハックは再び封建色の強い世界に投げ込まれるのであるが、一度はあくまでも空間的にはあるが文明社会から脱出したハックには理解に苦しむことばかりであった。その為にこの章ではハックの文明人に対する批判的な目がよく現れているのである。

グレンジャーフォード家のたたずまい、室内調度品、一見すれば豪華なものではあるがハックは、それらが実は気の抜けた、古びた味気のない物であることに気付き、単に体裁を保つ為に整えられた空虚な世界にすぎないことを知るのである。ここにアイロニーが生ずる。即ちグレンジャーフォード家の人々も彼らの見せかけの生活のように何か大切な物を失った人間なのである。その大切なものとは、人間らしさである。人間らしさの喪失はさらにこの家に伝わるフュード(feud)という因習にも象徴されている。

このフュードはハックにとって最も理解に苦しむものであった。相反する人間同士が、お互いに尊敬し合いながらも殺し合うのだが、そこに到った理由を知るものは今では誰もおらず、また、相反する両家が銃をかついで教会に行きながら、同胞愛の説教を良しとしていたり、全く矛盾だらけであるからである。結果的に相反する両家が激しい殺戮を始め悲惨な結末でこの話は終わるのだが、まさに歪められた道徳、正義である。個人では誰もが紳士淑女であるのに、不条理な因習の中に身を投じてしまうことにより何とも残酷な人間に変わってしまうのである。トウェインはこの話の中で、人間らしさを失ってしまった

人々の愚かさ、残虐さを描くと同時に、一見文化的で、華やかで格調高いように見える社会も実は暴力や恐怖から成る腐敗した文明社会に過ぎないということを述べているのである。同様に、第19章から第21章も残忍な事件を描いている。それは、牧歌的なセント・ピーターズバーグとは対照的な、遊び人がはびこる墮落したブリックスヴィル(Bricksville)という町で起きる射殺事件である。

南部貴族の端くれであり封建的な考えを持つシャーバン大佐(Col. Sherburn)にとって名誉は命より大切なものであった。故に、酔っぱらいのボグス(Boggs)にプライドを傷付けられたとなると決闘を申し込まざるを得ないものの、相手はたかが社会の底辺に生きている人間であれば決闘にも及ばず虫けら同様に殺してしまえばいいと考えるのである。名誉を守る為に、何の抵抗もなく相手の命を奪う。トウエインはここでもやはり人間らしさを失った人物を描いているのである。

途中短い中断を挟むものの、1880年に執筆されたものには共通するところがある。つまり、トウエインが描いている世界が河の上ではなく、陸の上の文明社会であるということである。文明社会の中に生き、いびつな精神が養われ、人間らしさを失ってしまった人々の愚かさや残忍さを描き、このような人間を造る腐敗した社会を批判しているのである。

1880年の執筆の中で見られる人間観は、晩年のトウエインの作品、例えば『ハドリーバーグを腐敗させた男』(The Man that Corrupted Hadleyburg)、『不思議な少年』(The Mysterious Stranger)に見られる pessimism の傾向に類似している。トウエインの晩年の pessimism は1890年以降の経済的苦しみや、妻や娘の死に立て続けに見舞われた為に確立されるのだが、その芽生えはもっと早い時期からであった。

Back in 1876 he [Twain] had written Mrs. Fairbanks a gloomy letter almost prophetic of his own personal disasters, one in which he expressed despondency over life and declared death a bringer contentment. ⁽¹⁰⁾

『ハック・フィン』を書き始めた時には既に pessimismの影が垂れ込めてきていたのである。年を追う毎にそれは深まっていき、1880年に書かれた第17章からはその傾向が作品の前面に現れ始めていたのである。よって、第17章から第21章と言うのは、たとえ中絶的なエピソードといえど、トウエインの気持ちの変化を見る上では見逃せない箇所である。実際、第21章の射殺事件は、彼が生まれ育ったハンニバル(Hannibal)で起きた事件をもとにして書かれたものであるが、同じハンニバルの思い出を綴った『トム・ソーヤ』とは違い

開拓時代の荒々しく醜い面が再現されている。トウェインの心は、既に思い出の故郷の暗い部分を描くほどずさんできているのである。

4. 終章へ——1883年——

3度目の中断から3年後の1883年、トウェインは再び『ハック・フィン』の執筆に入りついに終章まで書き上げるのである。トウェインは何故この時期になって、悩みに悩んだ『ハック・フィン』の問題解決を決意したのであるか。

トウェインは『ハック・フィン』を『トム・ソーヤ』のように過去への郷愁や逃避の為に書き始めたのではない。東部の生活に違和感を覚え、文明社会に幻滅していた彼は『ハック・フィン』を通して自分自身、何処かに自由を求めようとして書き始めたのである。そして、彼は自分が生まれ育った町を流れ、水先案内人として青年時代を送った最も馴染み深いミシシッピ河にその夢を託したのである。ハックが筏で河を下って行く時、トウェイン自身も自分の帰属の場を探し求めて、雄大で、決して文明に染まることのない無垢なる河に身を委ねようとしていたのである。しかし、1882年4月に『ミシシッピ河上の生活』(Life on the Mississippi)の第2部執筆の資料を求めて21年ぶりにミシシッピ河を訪れた時、その姿は全く変わってしまっていたのである。現実の河は人間と文明の力に屈し、機械文明の波に洗われ、彼が求めていた自由で無垢なる世界は、もうどこにも無くなってしまっていたのである。ハックを介しての自由への旅の先が見えてしまったのである。

このことが物語の最後の源泉となって、トウェインはハックとジムの旅を終わらせることにするのである。途中、何度も中断を余儀なくされた『ハック・フィン』の問題解決を決意したのである。第31章のハックの言葉こそまさにトウェインの決意なのである。

I was a trembling, because I'd got to decide, forever, betwixt two things, and I knowed it. I studied a minute, sort of holding my breath, and then says to myself:

"All right, then I'll go to hell"—and tore it up.

It was awful thoughts, and awful words, but they was said. And I let them stay said; and never thought no more about reforming. (pp.169—170)

ハックはキリスト教の教えによると地獄落ちの運命を選びとったのである。つまり、奴隷制を容認するキリスト教に反する決心をし、黒人奴隷に人間としての価値を全面的に認めただのである。このことは、文明が生んだ宗教はもちろんのこと、規則、因習、道徳を全て否定したことを示すのである。

ここで、トウェインは文明社会の中でつくられた規則や道徳には人間的良心から考えると間違っていることもあるのだ、ということをお話しているのである。そして、ハックの人間の成長を通して、人間の進歩の証である文明が、いかに人間を束縛し、最も大切な人間性を失わせているかということを示し、同時に人間味に溢れたハックとジムが持つ純粋で誠実な心こそ、文明社会に生きる人々が本来求むべき姿なのである、ということをお話しているのである。これがトウェインの解答である。彼の心の支えだったミシシッピー河をも汚染してしまった文明社会への反発なのである。

1883年の執筆の中で中心となるのは例の逃亡奴隷幫助の問題の解答ではあるが、トウェインの pessimism の一層の深まりを見る点でも重要な箇所と言える。第19章から、王様(The King)と公爵(The Duke)という二人の詐欺師が登場し悪事を展開しているが、ここに来て彼らの悪事は一段と悪化し、また、彼らの行動と共に、周りの人間のエゴ、愚かさ、卑しさ、残忍さが作品において浮き彫りにされていくのである。特に第33章での、二人の詐欺師にリンチを加える民衆の姿はその代表とも言うべきところである。

... then—here comes a ranging rush of people, with torches, and an awful whooping and yelling, and banging tin pans and blowing horns; and we jumped to one side to let them go by; and as they went by, I see they had the king and the duke astraddle of a rail—that is, I knowed it was the king and the duke, though they was all over tar and feathers, and didn't like nothing in the world that was human—just looked like a couple of monstrous big soldier-plums. (p.182)

自分達が騙された為の仕返しではあるが、民衆は二人を捕らえ、痛めつけることに満足しているのである。ここには人間としての情等何も感じられない。ただ、仕返しに目が眩んだ愚かな人間の姿と、人間の心の奥深くにある残忍さが前面に現れた恐ろしい姿があるだけである。

『ハック・フィン』を読んでいれば分かるようにトウェインは民衆の姿をよく描いている。ハックが陸に上がると必ず町という社会があり、文明人が民衆というまとまった姿で

登場している。そんな彼らの描写を見てみると、第19章では感傷過多で宗教的陶醉に陥り易い、あっさり二人の詐欺師に騙されてしまう愚かな姿であり、第22章ではただその場の気分で私刑に向かう恐ろしい群衆心理が描かれている。そして、その姿は第33章ではついに直接人間に対して残忍な行為を行う恐ろしいものになっているのである。作品における民衆の描写の変化を見るだけでも、トウェインが文明社会、そして文明人に、より一層幻滅感を抱いてきているかが理解できる。"Human beings can be awful cruel to one another." (p.182) この言葉はまさにトウェインが腐敗した社会に生きる文明人達に投げ掛けた問なのである。しかし、この解答は得られなかったのであろうか、トウェインの人間観はこの先、悲劇的な方向に進んでいくのである。

5. 終わりに

悩みに悩んで、何度も中断して8年がかりで書きあげた『ハック・フィン』。ハックを通して自分自身も自由への旅を続けたトウェイン。ハックはトム同様にトウェインの分身であったのである。トムがトウェインの少年時代の愉快的思い出を再現してくれる分身であれば、ハックは新しく芽生えたトウェインの視点を再現してくれる分身であったのである。そのハックを通しての旅は結局は文明社会に戻ってしまい、失敗に終わってしまったのであるが、最初からトウェインがこのような結末への展開を考えていたわけではなかった。時代の流れがもはやこのような旅を成功に終わらすことを不可能にしてしまったのである。ここでは取り上げていないが物語の最後にフェルプス農場のエピソードがある。そこでは再びトムが登場し『トム・ソーヤ』を思わせるロマンティックな世界が作り出されている。『トム・ソーヤ』執筆中にハックに魅かれたように『ハック・フィン』執筆中にトムに魅かれたのだろうか。つまりは、もうハックを通して現実を見たくはなくなったのではないだろうか。 "...and so there ain't nothing more to write about..." (p. 229) この終章のハックの言葉は、自由を求める場所ももうどこにもないので、これ以上書けない、というトウェインの嘆きのように感じられる。物語は、ハックが "...I reckon I got to light out for the Territory ahead of the rest..." (p. 229) と幾分希望的に終わってはいるが『ハック・フィン』を脱稿した年代と西部開拓のフロンティアの位置を考えても、本当にもう自由の土地などなくなっており、そのことはトウェイン自身が一番よく分かっていたのである。

[注]

1. Albert Bigelow Paine, Mark Twain's Letters (New York: Harper and Brothers, 1917), I, 196.
2. Ibid., I, 219.
3. Ibid., I, 258—259.
4. トウェインとハウエルズの親交は1869年に Atlantic Monthly の事務所でお会った時から始まり、トウェインにとってハウエルズは良き指導者であり忠告者であり、二人はしばしば手紙を交し合っていた。
5. Ibid., I, 267.
6. Clemens, Samuel Langhorn, The Adventures of Tom Sawyer, in Writings of Mark Twain (Hon-no-tomosha, 1988), VIII, 198.
7. Paine, op. cit., I, 283.
8. 実際の完成作品では、ほぼ4分の1の、第1章から第16章までに相当する。
9. Samuel Langhorn Clemens, Adventures of Huckleberry Finn (New York: W.W.Norton & Company, 1977), 17. (今後、本作品からの引用は全てこの版により括弧に頁数で示すものとする。)
10. Hudson E. Long, Mark Twain Handbook (New York: Hendricks House, 1957), 260.